

を鏡合わせのように使い、モーツァルト《コジ・ファン・トゥッテ》さながらに相手のソプラノを取り換えながら物語が進み、最後は冒頭と同じシーンがコンスタンツェとペドリッロによって再現される世界から、パーヴォル・プレスリクが好演したベルモンテがはじき出されるといふ結末は、物語の主旨が見えない。当然ブーイングを浴びたが、出演者たちに守られ、無事に幕が下りた。(中東生)



音楽的許容範囲を越えていたヘルマンの演出だった《後宮からの逃走》©T+T Fotografie/Tanja Dorendort

Opera クルレンツイスがキャンセル、チューリヒ歌劇場《後宮からの逃走》

前シーズンのヴェルディ《マクベス》に引き続き、テオドール・クルレンツイスの指揮が注目されていた、チューリヒ歌劇場のモーツァルト《後宮からの逃走》だったが、クルレンツイスが病気のため練習開始直前にキャンセル、マクシム・エメリヤニチェフの指揮で11月6日の初日を迎えた。若い頃のクルレンツイスを思わせるようなエネルギー溢れる指揮で、チューリヒ歌劇場専属楽団員で構成されている古楽器オーケストラ「ラ・シンティエツラ」に細やかな表情をつけて好演した。しかし、歌手たちを統率するには至らず、一定の歌唱力を持った歌手陣を揃えていても、このオペラに必要な、抑制された、研ぎ澄まされた緊張感を持って歌えている歌手は一人もいなかった。

その中で一番光っていたのは、ミヒャエル・ローレンツが歌ったペドリッロの最後のアリアだった。コンスタンツェのオルガ・ベレチャッコも高音の確かさなどから安定した歌唱を聴かせた。

演出のダヴィッド・ヘルマンは、この物語と現在のイスラム社会に対する脅威とを結びつけ、効果音を駆使したマイケル・ジャクソン《スリラー》のプロモーション・ビデオを思わせる場面は成功させたが、モーツァルトの歓喜の音楽を皮肉的に歌わせるなど、音楽的許容範囲を越えていた。その上、テノール二人